宮城県図書館蔵伊達文庫『詠百首和歌』の翻刻と解説

松本麻子

宮城県図書館伊達文庫に『詠百首和歌』（伊九一一・二六八・四）がある。これは、寛永十四年（一六三七）三月三日から五月十四日まで行われた『寛永十四年着到百首』のうち、尭然の詠進した百首をまとめたものである。

『寛永十四年着到百首』は、後水尾院と宮廷歌人により一日一首ずつ詠まれた着到和歌で、後水尾院の他に、烏丸光広・中院通村・平松時庸の百首が存在する。[1]『黄葉集』巻頭には、「院御着到百首寛永十四年、春二十首…」とあり、光広の着到和歌を掲載する。通村の『後十輪院集』には、集中に「寛永十四仙洞着到」または「十四仙洞着到」とある歌が四〇首見られる。『於仙洞御着到百首』（京都大学平松家本、函番　平松第七門、セ一〇）には、平松時庸の着到百首が記されている。他にも、三条西実条詠『仙洞着到百首和歌』に、この時の着到和歌と同題があることから、実条は参加者の一人ではないかと推測されている。[2]

さらに、宮内庁書陵部に十巻の自筆本とされる『智忠親王詠御着到百首和歌寛永十四一～十』（函番　桂一〇一五）があるため、智忠親王も詠進者の一人とわかる。国立歴史民俗博物館蔵高松宮家伝来禁裏本に『具起卿詠藻』（函番　ふ一三二）があり、集中に「仙洞御着到百首和歌」として百首が載る。従って、岩倉具起もこの着到和歌を詠進していたことが判明する。宮内庁書陵部『仙洞着到和歌御題寛永十四年三月三日』（函番　桂一三六四）には、この着到和歌の歌題がまとめられ、出題者は飛鳥井雅章であると記される。ただし、雅章がこの着到和歌を詠進していたかは未詳。結局、現在では『寛永十四年着到百首』は後水尾院の他、智忠親王・烏丸光広・中院通村・平松時庸・岩倉具起が詠進し、三条西実条も参加者の可能性があり、出題者は飛鳥井雅章であることが知られるのである。

本稿で紹介する尭然の『詠百首和歌』は管見の限りでは孤本である。外題・内題や本文に「仙洞」「着到」といった表記はないものの、『寛永十四年着到百首』と歌題はすべて一致し、三月三日から五月十四日まで一日一首が記されている。後述するが、内容の面からも『寛永十四年着到百首』と関わりがあるため、『詠百首和歌』は『寛永十四年着到百首』の際詠まれた尭然の百首をまとめたものと見てよい。奥書にあるように、延宝四年（一六七六）七月十九日に書写された（書写者未詳）。作者尭然は、法親王。慈恩院とも。慶長七年（一六〇二）生、

寛文元年（一六六一）没。「後陽成天皇第六皇子。二品。妙法院門跡となり、三度天台座主を勤めた。（略）書画に秀で、香、立花、茶ノ湯にも通じていた」[3]とある。明暦三年（一六五七）に後水尾院から尭然の他、道晃、岩倉具起、飛鳥井雅章への第一次古今伝受があった。

『詠百首和歌』には「岸柳」の題で詠まれた「龍田川錦にはあらで春風に浪の綾織る岸の青柳」がある。これは、同じ『寛永十四年着到百首』で詠まれた同日同題「岸柳」の烏丸光広の歌、「寄る波の綾織りそへて影ひたす立田の岸の青柳の糸」（黄葉集・一六）[4]に近い。「綾織る」・「岸の青柳」という表現、「龍田」という場所が一致しており、類似した趣向と言える。「鵜川」の題で詠まれた「櫂くだすほどやなからん夏の夜の暁闇にいづる鵜舟は」があるが、これは通村の『後十輪院集』に「寛永十四仙洞着到」の詞書で載る、「櫂くだすいくせを波に数へてや月の鵜舟のさしのぼるらん」（四六五）と「櫂くだす」「鵜舟」が重なる。「鷹狩」の題の歌「狩衣すその原の冬枯れにまがふかたなき鳥の落草」についても、同じ着到和歌で後水尾院が詠んだ「鷹狩／暮るるをも知らずや分くる狩衣猶心ひく鳥の落草」（後水尾院御集・一一三二）と、「狩衣」「鳥の落草」といった表現が共通する。「櫂くだす」の表現は、他の和歌には用いられない珍しいものである。

このように、光広・通村・後水尾院の詠んだ『寛永十四年着到百首』と尭然歌は表現の面でも近しいものがある。後水尾院歌壇で好まれた表現については、今後『詠百首和歌』を詳しく見てゆく必要があるだろう。以上述べたように、尭然の『詠百首和歌』は、近世初期の後水尾院歌壇の活動を知る上で非常に重要な資料であると考えられる。そこで、今回はここに全文を翻刻し紹介する。翻刻に際し、仮名遣いと踊り字は底本のママに、旧字は新字に改め、丁の変わり目は」で示した。

【書誌】

『詠百首和歌』。宮城県図書館伊達文庫。番号、伊九一一・二六八・四。写本一冊。外題、題簽に「尭然着到百首」、内題に「詠百首和歌」。題簽は銀箔。表紙は、香色無地。本文楮紙。寸法、縦一九糎×横一四・一糎。本文、墨付一九丁、一面九行書、一首二行。遊紙、前後ともに一丁ずつ。一丁表に「伊達文庫」、「伊達伯観瀾閣図書」の朱印、裏の遊紙に「壁」印。奥書に延宝四年（一六七六）七月十九とある。

【翻刻】

詠百首和歌　　尭然

春二十首

立春　　三月三日

出る日のひかりもけふはあらたまの年の緒なかきはるやたつらん

朝霞　　四日

さたかなる日かけにもれて山のはも今朝はかすみをいつるとそ見る

谷鶯　　五日

谷川やとくるこほりの浪のはなにこゑ匂はするはるのうくひす

残雪　六日
みねたかみかけもうらゝにうつる日の空にしられぬ去年のしら雪

若菜　七日
さそひつゝいつる野沢のあさこほり心もとけてつむわかなかな

里梅　八日」
かほり来る風をしるへにたつね見んはなさくむめのさとのかき根は

簷梅　九日
朝な夕なうつすもふかき袖のうへにあまりて匂ふのきのむめか枝

春月　十日
わりなしとなにかこつらんはるの夜はかすむならひの月のひかりを

春曙　十一日」
春はまたかすみに匂ふ山まゆのおもかけあかぬ明ほのゝ空

帰雁　十二日
わかれゆく名残やおもふなれもまたなきて都をかえるかりかね

春雨　十三日
絶々の軒の雫のおとそふやかすみなからのはる雨の空

岸柳　十四日」
龍田川錦にはあらてはるかせに浪のあやをるきしの青柳

待花　十五日
またれてはつれなき色に春風のさそふにもろき花のこゝろも

初花　十六日
咲そむるこすゑのはなは年ことに見しやあらぬとそふいろ香かな

見花　十七日」
色にそみ匂ひを袖にうつしても心にあかぬはなを見るかな

花盛　十八日
たくひなき花のさかりやけふならんなへての春のいつはありとも

落花　十九日
うつり行いろよりさそふことはりもはなにわするゝはるの山かせ

款冬　廿日」
山吹のはなの露もや渕となりていろになかるゝ井手のたま川

池藤　廿一日
かけうつす汀の浪はいろかえてむらさきにほふ池のふちか枝

暮春　廿二日

けふのみのはるをそおもふ鳥のこゑ花のいろかもあかぬわかれは」

夏十五首

更衣　廿三日

はなそめのはるの余浪を立かえてたもとさへうき我ころもかな

卯花　廿四日

夕やみの道もたとらす卯の花の月かけてらすかきねつゝきは

待郭公　廿五日

たのめおくはつねならねとほとゝきす」いくよな〳〵をまちあかすらん

聞郭公　廿六日

まてしはしきゝもさためんほとゝきすゆめかとたとる夜半の一こゑ

郭公稀　廿七日

子規わすれぬほとにおとつれて又いまさらにこゑのまたるゝ

故郷橘　廿八日

古さとを猶しのへとやたちはなの」むかしなからの香ににほふらむ

早苗　晦日

千町田のすえものこらし賤の女かとる手あまたにうふる早苗は

五月雨　閏三月一日

庭の面にまかせぬ水も岩こえてたき波をつるさみたれのころ

鵜川　二日

かいくたすほとやなからんなつの夜の」あかつきやみにいつる鵜ふねは

叢蛍　三日

生しける草のかけにもかくれめやもゆるほたるのしたのおもひは

夏草　四日

庭のおもはしける草葉に道とちてなつは人めそいとゝかれ行

夏月　五日

涼しさはたゝ秋風にむかふよを」わすれぬ月のあくるほとなき

夕立　六日

うきくもは風にきほひてふる雨のあしとくすくる夕立のそら

杜蝉　七日

入日さす森のこの葉の下そめやまたきしくるゝせみのもろこゑ

夏祓　八日

底きよき川瀬のなみに御そきして」袖のあつさもみな月のそら

秋二十首

早秋　九日

吹風のをとはなけれと散そむる一葉にみせて秋は来にけり

七夕　十日

くみてしるうらみもさそな天の川あふせまれなるほしのちきりは」

荻風　十一日

秋かせに露をはいはし荻のはのそよけは夢もむすはさりけり

萩露　十二日

朝露にぬれし袂はほさすともなをこそわけめのちの萩原

女郎花　十三日

うちなひきしほるゝ野への女郎花たゝあき風の露のみたれに」

夕虫　十四日

をく露のゆふへはいとゝうき秋を我身ひとつとむしやなくらん

夜鹿　十五日

きく人も袖こそぬるれおしかなく露の草ふしいかに侘らむ

初雁　十六日

あき風のたちにし日よりとこよをも出てや来つる初かりのこゑ」

秋夕　十七日

そてのみと何をもひけん草も木も露にはぬるゝあきのゆふへを

山月　十八日

吹はらふきりよりうへの山の端のあらしにすめるあきの夜の月

野月　十九日

露むすふ野辺の千種に月もなをこゝろうつしてかけやとすらむ」

川月　廿日

早瀬川浪になかれてふくる夜の月かけせかん柵もかな

江月　廿一日

住の江の松ふく秋のうらかせに月かけよする沖つしらなみ

浦月　廿二日

和田の原八重の塩路のなみの上にちさとをかけてすめる月かけ」

籬菊　廿三日

うつろふもいろまさるへききくのはなまかきに霜をかさねてもみん

擣衣　廿四日

秋さむきあさちか宿のわひしさをよそにもしれとうつころもかな

暁霧　廿五日

さたかにはひかりも見えす立まよふきりに夜ふかき晨明の空」

岡紅葉　廿六日

名にしをふ岡の入日のくれなゐになを色ふかき秋のもみち葉

瀧紅葉　廿七日

たきのいとも風にみたれて紅葉丶のなかる丶いろはせくかたもなし

九月尽　廿八日

明るよりのあきのかたみも置霜にはかなく見せてくる丶空かな」

冬十五首

初冬　晦日

神無月梢のもみちちりはててきのふの秋のいろものこらす

時雨　四月一日

うき雲は空にはれても岡辺なる松にしくれてゆくあらしかな

落葉　二日

さそひ行風におくる丶いろもなを」をのれともろくちるこのはかな

朝霜　三日

かれのこる草のたもとをあさな〳〵猶やつせとや霜は置らん

寒草　四日

百草のはなにむすひし露のまに面かけかはる野辺の冬かれ

千鳥　五日

ゆくかたも同しいそへのさよちとり」浪の立居もうらみてやなく

水鳥　六日

かれてたつ芦間にうかふ水鳥の青羽はかりそ霜につれなき

氷始結　七日

池水のいはまはかりにとちそめて朝風見ゆるうすこほりかな

冬月　八日

空にたつ雲の浪さへこほるよの」あらしにさゆる冬の月かけ

鷹狩　九日

かり衣すその丶原の冬かれにまかふかたなき鳥の落草

野霰　十日
夕日かけうつるもうすき山風にあられみたるゝ野辺のさむけさ

浅雪　十一日
唯一重枝につもりてふかみとり」松をあらはす庭のしら雪

積雪　十二日
わけていてむ道もやいつこ下折の後さえつもる雪のくれ竹

閑中雪　十三日
ひとりふたりいほりならへてすむ人の道さへ絶る雪のさひしさ

歳暮　十四日
花さかん春を心にいそく身の」さのみは年のくれもしたはし

恋二十首

初恋　十五日
生初るほとたにうきをおもひ草しけり行へきすゑいかにせん

忍恋　十六日
我のみのうき名ならねは年月をこゝろひとつになをもしのはん

祈恋　十七日」
あふことはうけひかすともき舟川せめてうきなをなかさすもかな

聞恋　十八日
人つてに聞よりやかてわりなくもみぬ俤の身をもはなれぬ

不逢恋　十九日
いつかさて夕つけ鳥のをのか音をうらみてかえる空にきかまし

契恋　廿日」
ちきり置月日はよしや過すともいたしこと葉のすゑをたかふな

逢恋　廿一日
おもひねのゆめはさたかに見し物をあふ夜はさらにうつゝともなき

別恋　廿二日
くれにもといふことのはになくさみてうきはのこらぬきぬ〳〵のそて

後朝恋　廿三日」
わかれこし名残もかなし目には見て手にはとられぬ人のおもかけ

遠恋　廿四日
さはり有人めにはあらて我中におもふもとをしは山しけやま

近恋　廿五日
折々はこゑきく程の中かきを中のへたてに人そつれなき

馴恋　廿六日」

猶そうき朝夕なるゝ中にしもへたてゝとをき人のこゝろは

顕恋　廿七日

いかにしていひもはるけん今はよにしのふとせしももるゝうき名を

偽恋　廿八日

はかなしや人のこゝろのいつはりを我まことよりたのみそめつる

増恋　廿九日」

（歌ナシ）

変恋　晦日

涙川いつしかはやくふちは瀬にかはるこゝろをしらてくるしき

経年恋　五月一日

いつまてかかくて年へん人はなをつらきこゝろのみさほなりけり

忘恋　二日

かくはよも忘はてしを今はよになしと聞てや猶過すらん」

片恋　三日

よりもこぬ人のこゝろはかたいとのむすほゝれ行中そくるしき

恨恋　四日

うらむるをことはりもせて過しこそまた一ふしのつらさなりけれ

雑十首

浦松　五日」

おきつ風吹つたへつゝことのはのつきせぬたねや和歌のうら松

窓竹　六日

いたつらにふしやくらさんそよさらに窓うつ竹のおとろかさすは

山家嵐　七日

聞なれぬみねのあらしに住そむるこゝろはいつかしつかならまし

田家　八日」

いなはもる草の戸さしの明くれをおくるもさひし小田のかり庵

羈旅　九日

けふも又いく重こへけん白雲のかゝるたかねを跡にのこして

述懐　十日

我なからをろか成身をおもふこそ良悪をわくこゝろ成らめ

懐旧　十一日」

花もみちいろかに付てはる秋の消しむかしを何しのふらむ

神祇　　十二日

いまも猶よをてらしつゝ明らけき日吉の神を空にあふかん

尺教　　十三日

雲はれぬふもとのさとはくらけれとたかねはてらす朝日かけかな

祝言　　十四日」

神風のふきつたえたる君か代は民の草葉のなひかぬもなし」

右者尭然法親王百首之和歌也
被以真筆名立書写之間増恋之
歌一首書落畢残念無限而已
猶後人得正本者正之矣

延宝四年
七月十九日

〈付記〉
本稿は平成二七年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金課題番号:15K02257）の研究成果の一部をまとめたものである。また、『詠百首和歌』の調査では宮城県図書館の御協力を得、翻刻の許可を頂いた。心より感謝申し上げる。

（1）鈴木健一『近世堂上歌壇の研究』（一九九六年、汲古書院）、久保田啓一校注『近世和歌集』（新編日本古典文学全集、二〇〇二年、小学館）に詳しい。
（2）井上宗雄・山田洋嗣編『中世百首歌　七』（古典文庫、一九八八年）
（3）『和歌文学大辞典』「尭然」（項目執筆中村健史、二〇一四年、古典ライブラリー）
（4）和歌の引用はすべて新編国歌大観・私家集大成による。引用に際し読みやすさを考慮して、一部のひらがなを漢字に、新字を旧字にあてかえた箇所がある。また、『詠百首和歌』は、翻刻部分とは相違し、和歌に濁点を付し、漢字にあてかえて引用した。

（まつもと　あさこ／日本文学）